

（「源泉かけ流し温泉サミット in 十津川」が開催）

10月2日、「源泉かけ流し温泉サミット in 十津川」（十津川村、十津川村観光協会など主催）が同村平谷のホテル^{すぼる}で開催された。温泉旅館関係者など約150人が参加。「ほんものの温泉」とは何か、今後の温泉地の取り組み方が議論された。

温泉地全体で「源泉かけ流し宣言」をしているのは、十津川温泉郷、川湯温泉（北海道^{てしかが}弟子屈町）、関温泉（新潟県妙高市）の三湯。サミットでは、三湯の温泉報告や、独自の取り組みを行っている他温泉地を招いてシンポジウムを行った。

札幌国際大学観光学部の松田忠徳教授が、「今、温泉地に求められる座標軸～心身再生の場をめざし～」と題して基調講演をした。内容は次のとおり。

「ほんものの温泉は、源泉かけ流し温泉である。地上に湧き出た源泉は空気に触れることによって酸化して鮮度が下がるが、源泉かけ流しの全ての湯は、源泉率100%を目指している。一方、同じ温泉といっても、循環、加温、加水、入浴剤及び殺菌剤を入れるなどをしたものは、まがいものの温泉である。

昨年の白骨、伊香保、水上、道後、湯布院の各地でまがいものの温泉が見つかり、消費者の温泉に対する信頼感が失われている。温泉地が生き残るためには、『源泉かけ流し温泉』をした十津川温泉郷、川湯温泉、関温泉のほんものの温泉を参考にして温泉地の再生に取り組むしかない。もう、温泉は横並びではない。それぞれの個性を打ち出していく時代になった。消費者は本物指向で、いいものがあれば、高くても、遠くても来てくれる。温泉地の使命は、人々が温泉で心身を再生し、エネルギーを得て、日々の生活を活性化できる場を作ること。」

シンポジウムでは、大分県の別府温泉と岡山県の湯原温泉が事例を発表。十津川村観光協会長古田雅文氏ら三湯の代表者がパネリストとなり、ほんものの温泉の楽しみ方などについて意見交換をした。

別府温泉の斉藤雅樹氏から、法律で義務付けられた項目以外に浴槽内の温泉分析情報や、利用者によるお湯の感覚評価等を加えた「温泉カルテ」で情報開示し、利用者の信頼を得ているとの説明があった。

湯原温泉の古林伸美氏は、観光客に温泉の説明を出来るように地元の人を育てる「温泉指南役」制度を作り、58名ほどを育て、観光客の人気を得ていることを紹介した。

最後に、「温泉利用者の視点に立った温泉情報の積極開示」「温泉文化の継承と創出」「温泉地の連携を深め本物の温泉の実現」を盛り込んだ「十津川・川湯・関の三温泉による共同宣言」が発表された。なお、来年は北海道・川湯温泉で開催される。（上田）



源泉かけ流し温泉サミット シンポジウム

これからの主な催し

〔主な行事〕

●11月14日（月）

大神神社 酒祭り

新酒の仕込みの季節を迎え、醸造安全を祈る。
JR 桜井線三輪駅から徒歩7分

●11月23日（水）（勤労感謝の日）

四社神社 秋祭り

あらゆる産業の豊穰祭で獅子神楽を奉納する。
（自動車）名阪国道針IC→国道369号線→榛原町→国道369号線→神社は御杖村役場の近く。

●12月14日（水）

東大寺 仏名会

起源は平安時代の初期、一夜または三夜を限って、過去・現在・未来の三千仏名を唱え、その年の罪悪を懺悔する法要であった。今は、過去・現在・未来と1年ごとに3か年で祈修することとなった。

JR・近鉄奈良駅から市内循環バス
大仏殿春日大社前下車 徒歩5分